

看護臨床実習における ストレスとコーピングおよび性格との関連

近村 千穂^{1,*}, 小林 敏生¹, 石崎 文子², 青井 聡美³

飯田 忠行⁴, 山岸 まなほ¹, 片岡 健¹

キーワード (Key words) : 1. ストレス (stress) 2. コーピング (coping)
3. 性格 (personality)

本研究は、看護学生の臨床実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連について検討した。対象はA大学看護学科3年生の女性28名である。方法は、ストレスの程度の評価には日本版State Trait Anxiety Inventory (STAI)を、また、コーピングの測定にはコーピング特性簡易尺度 (BCSP)を用い、それぞれ実習前と実習中の計2回実施した。性格の評価は、矢田部・ギルフォード検査 (YG検査)を用いて、臨床実習のない春期休暇中に実施した。その結果、STAIの状態不安は、実習前に比べ実習中で高値を示し、臨床実習で看護学生がストレスを感じていると考えられた。特に「社会的不適応」、「劣等感」、「非協調的」などの性格傾向では、実習中の状態不安の増強を認めた。また、それらの性格傾向では「他者を巻き込んだ情動発散」などの消極的コーピングスタイルを多用する特徴を認め、実習ストレスの感じ方やコーピングには、個々の性格が深く関与することが示唆された。

緒 言

医療従事者養成課程における臨床実習においては、学生は様々なストレスに直面することで不安が増大すると報告されている¹⁻⁴。看護教育カリキュラムにおいても、臨床看護実習 (臨床実習)は、学内で学んだ知識や技術を応用し実践的な能力を身につける場としてきわめて重要な役割を担っている。しかし、初めての病棟環境や人間関係、自己の看護技術に対する不安、生活パターンの変化など、学生にとって大きなストレスに直面すると言われている^{1,2}。そして、臨床実習における不安がそれらのストレスと深くかかわっているといわれている²。一方、ストレス反応は人によって様々であり、またその反応の違いは、個人の性格や過去の経験などによって影響を受けると考えられ⁵、それらの関連性についての報告もある^{6,7}。しかしながら、これまでの研究では、臨床実習中のストレス^{2,8,9}、コーピング^{10,11}、ストレス反応の変化^{12,13}についての報告は多いものの、臨床実習のストレスに対するコーピングと性格との関連¹⁴について検討されたものは少ない。

本研究では、看護学生の実習ストレス、またそのストレスに対するコーピングの変化および性格との関連を検討し、臨床実習のストレスに対するソーシャルサポート

や効果的な看護実習指導を行うための基礎資料を得ることを目的とした。

研究方法

1. 研究対象

A大学看護学科に在学し、平成17年度に臨床実習を行う3年生全員60名を対象とした。

研究協力に同意を得た33名にアンケート調査を行い、その中から記入漏れのある者を除外した28名 (平均年齢: 21.5 ± 0.6 歳) を分析対象とした。対象とした28名は全員女性であり、健康状態に問題がなく薬の常用もなかった。

2. 調査方法

実習前の平成17年8月から9月と、実習中の平成17年10月から平成18年2月に、自記式の質問紙調査 (ライフスタイル、不安、コーピング) を実習前と実習中の2回実施した。また、同一被験者に対し、実習の影響のないと考えられる春休み期間中 (平成18年3月) に、性格に関する自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、個々に配付し記入後、その場で回収を行った。

・ Relationships among stress, coping, and personality in nursing clinical training

・ 1) 広島大学大学院保健学研究科 2) 県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科 3) 県立広島大学保健福祉学部看護学科

4) 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学

・ *連絡先: 県立広島大学 三原キャンパス 近村千穂

TEL/FAX 0848-60-1147 E-mail: tikamura@pu-hiroshima.ac.jp

・ 広島大学保健学ジャーナル Vol. 7 (1): 15~22, 2007

3. 調査内容

1) ライフスタイル

対象者の背景とストレスに関与すると考えられるライフスタイル²⁾について、年齢、性別、住居形態、食事、アルバイト、部活動、飲酒、喫煙、健康感（最近の自分の健康について、どのように感じるか）、睡眠（現在、睡眠のことで困っていることがあるか）、眠気（授業中、実習中に強い眠気を感じることもあるか）の11項目について調査した。

2) 不安

不安は、状態不安と特性不安に大別され、それらを別々に測定できる不安の尺度である STAI (State Trait Anxiety Inventory)^{16, 17)} を使用した。状態不安は、個人がその時におかれた環境条件により変化する一時的な情緒状態を示すものである。特性不安とは、不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の性格傾向を示すものである¹⁸⁾。状態不安・特性不安ともに20の質問項目で構成されており、各項目は1点から4点の4段階尺度で、項目得点を合計して得点化する(20点から80点)。合計得点が高いほど不安が強いことを示しており、STAIの評価段階基準では、状態不安については、42～50点を「高い」、51点以上を「非常に高い」とし、特性不安については、45～54点が「高い」、55点以上が「非常に高い」とされる。過度の不安はストレスフルな状態を招く¹⁹⁾と考えられるので、STAIを用いて状態不安を測定することでストレス反応の一つの指標とし、特性不安を測定することで性格傾向の指標のひとつにできると考えた。

3) コーピング

コーピング検査の多くは、質問項目数が30項目から60項目と多いことや対人関係についてなど使用範囲の限定や使用場面の指定があることから、今回は、メンタルヘルスに適用でき、比較的少数の項目(18項目)からなる信頼性・妥当性の検証されたコーピング特性簡易尺度(BSCP)²⁰⁾を用いて測定を行った。この尺度は、「積極的問題解決」、「問題解決のための相談」、「気分転換」、「他者を巻き込んだ情動発散」、「回避と抑制」、「視点の転換」の影山らが抽出した²⁰⁾6因子(各因子3問)から成り立っており、ほとんどない：1点、たまにある：2点、ときどきある：3点、よくある：4点の回答を各因子3問の合計点数の平均をその因子の得点とした。

4) 性格

性格検査には、矢田部・ギルフォード性格検査(YG検査)¹⁵⁾を用いた。YG検査は、12の性格尺度「抑うつ」、「気分の変化」、「劣等感」、「神経質」、「主観的」、「非協調的」、「攻撃的」、「活動的」、「のんき」、「思考的外向」、「支配性」、「社会的外向」を調べるための120の質問項目(各尺度10問)から成り立っており、はい：2点、

どちらでもない：1点、いいえ：0点の回答を合計(各尺度20点満点)する。また、各尺度間で関連の深いもの同士を組み合わせる6因子に分類されているが、その中から今回は、12の性格尺度中「抑うつ」、「気分の変化」、「劣等感」、「神経質」の4尺度の合計(80点満点)で判断する「情緒不安定」の因子と「主観的」、「非協調的」、「攻撃的」の3尺度の合計(60点満点)で判断する「社会的不適応」の因子を加えることにより、12性格尺度および2因子で性格を判定した。また、そのプロフィールの型から性格の特徴を判定した¹⁶⁾。

4. 分析方法

ライフスタイルに関する調査内容の各項目について、基礎統計量の集計を行い、実習前と実習中の比較にはWilcoxonの符号付順位検定を用いた。不安に関する調査内容の各項目の実習前と実習中の比較については、対応のあるt検定を用いた。コーピングに関する項目の実習前と実習中の比較については、Wilcoxonの符号付順位検定を用いた。性格に関する各項目については、基礎統計量の集計を行った。また、性格と不安との関連および性格とコーピングとの関連についてはSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。統計ソフトはSPSS Ver.11.5を用い、有意水準は $p<0.05$ とした。

5. 倫理的事項

調査対象者に文書ならびに口頭で、研究の趣旨、研究方法、倫理的配慮、学会や論文公表の承諾などについて具体的に説明した。質問紙には氏名等の個人情報が含まれるが、これらの情報は結果の返却のためにだけ使われ、得られた情報は統計処理を行い個人が特定できないようにすること、本研究目的以外に使用されることがないこと、調査への参加は自由意思であり、いずれの経過においても拒否できることを説明し、研究協力の同意を同意文書への署名で得た上、調査を開始した。

結 果

1. 対象者のライフスタイル

対象者のライフスタイルについて表1に示した。

「住居形態」、「食事」、「喫煙」、「睡眠」、「眠気」については、実習前と実習中で有意な変化は認めなかった。アルバイトの状況については、1週間あたりの勤務回数および勤務時間はともに実習前に比べて実習中に減少する傾向にあった。実習前と実習中の部活動の状況を比較すると、1週間あたりの活動回数および活動時間はともに実習中に有意に減少していた。

健康感については、実習前は、「健康」あるいは「まあまあ健康だ」と思う者がほとんどであったのに対し、

実習中では、「健康」あるいは「まあまあ健康だ」と思う者が減り、「どちらかといえば健康でない」とする者が増加した。

2. 不安の実習前と実習中の比較

対象者の状態不安は、実習前から既に「高い」レベルにあったが、実習中には有意に高くなり、評価段階基準が「高い」から「非常に高い」というレベルに変化を示した (p=0.007) (表2)。また、対象者の特性不安も状態不安同様に実習前から既に「高い」レベルにあり、実習中には得点が高くなる傾向が認められたが、評価段階基準は「高い」のままであった。

3. コーピングの実習前と実習中の比較

コーピング検査の各因子の得点は、「積極的問題解決」

では実習前 (3.08 ± 1.88) が実習中 (3.00 ± 0.61) に、「問題解決のための相談」では実習前 (3.21 ± 1.85) が実習中 (3.17 ± 0.64) に、「気分転換」では実習前 (2.70 ± 1.44) が実習中 (2.42 ± 0.82) に、「他者への情動発散」では実習前 (1.88 ± 1.07) が実習中 (1.68 ± 0.78) に、「回避と抑制」では実習前 (2.31 ± 0.87) が実習中 (2.15 ± 0.68) に、「視点の転換」では実習前 (2.75 ± 1.03) が実習中 (2.55 ± 0.76) へと変化したが、有意ではなかった。

4. 性格

YG 性格検査についての分析結果を、得点の高い順に、表3に示した。「社会的外向」、「活動的」といった尺度が高く、一方で「気分の変化」、「非協調的」といった尺度は低く、積極的かつ活動的な行動特性 および安定した情緒特性を認めた。

表1. 対象者のライフスタイルの実習前と実習中の比較

(n=28)

背景	実習前：人 (%)	実習中：人 (%)	p 値
アルバイトの平均回数 (回/週)	2.4回	0.9回	0.050
平均時間 (時間/週)	29.4時間	9.3時間	0.075
所属者の部活平均回数 (回/週)	1.4回	0.8回	0.034*
平均時間 (時間/週)	4.9時間	1.3時間	0.039*
健康感			
健康だと思う	3 (10.7)	1 (3.6)	0.025*
まあまあ健康だ	21 (75.0)	15 (53.6)	
どちらかといえば健康でない	4 (14.3)	12 (42.8)	
健康ではない	0 (0)	0 (0)	

(* : p<0.05 Wilcoxon 検定)

表2. 不安の実習前と実習中の比較

(n=28)

項目	(平均値±標準偏差)		p 値
	実習前	実習中	
状態不安	46.3 ± 8.1	52.3 ± 8.9	0.007**
特性不安	46.1 ± 8.2	48.5 ± 9.1	0.064

(** : p<0.01 Paired t test)

表3. 性格検査の結果

(n=28)

尺度	(各尺度 20 点満点)	(平均値 ± 標準偏差)
社会的外向：(对人的に外向的, 社交的, 社会接触を好む傾向)		13.9 ± 4.3
活動的：(活発な性質, 身体を動かすことが好き)		11.1 ± 4.3
支配性：(社会的指導性, リーダーシップのある性質)		10.7 ± 4.1
のんき：(気軽な, のんきな, 活発, 衝動的な性質)		10.0 ± 4.5
思考的外向：(非熟慮的, 瞑想的および反省的の反対傾向)		9.2 ± 4.7
神経質：(心配性, 神経質, ノイローゼ気味)		8.6 ± 4.8
抑うつ：(陰気, 悲観的気分, 罪悪感の強い性質)		8.5 ± 7.1
劣等感：(自信の欠乏, 自己の過小評価, 不適応感が強い)		8.4 ± 4.1
主観的：(客観的でない, 空想的, 過敏症)		7.7 ± 3.3
攻撃的：(愛想が悪い, 社会的活動性)		7.6 ± 3.8
気分の変化：(著しい気分の変化, 驚きやすい性質)		7.5 ± 5.2
非協調的：(不満が多い, 人を信用しない性質)		5.0 ± 3.8
情緒不安定：(抑うつ+気分の変化+劣等感+神経質) †1		32.9 ± 18.6
社会的不適応：(主観的+非協調的+攻撃的) †2		20.5 ± 9.4

†1 : 80 点満点 †2 : 60 点満点

5. 性格と不安の相関

実習前の状態不安においては、性格検査のすべての項目において相関が認められなかった(表4)。しかし、特性不安においては、性格検査のうち、「社会的不適応」、「劣等感」、「非協調的」、「攻撃的」との間に正の相関を認めた。実習中で状態不安との正の相関を認めた性格検査は、「社会的不適応」、「主観的」、「気分の変化」、「劣等感」、「非協調的」であった。特性不安との正の相関が認められた性格検査は、「攻撃的」のみであった。

6. 性格とコーピング検査の相関

実習前では、コーピングの「積極的問題解決」と性格の「抑うつ」($r=0.416$)、および「主観的」($r=0.400$)との間に正の相関を認めた($p<0.05$) (表5)。コーピングの「問題解決のための相談」と性格の「社会的外向」($r=0.432$)に正の相関、「非協調的」($r=-0.391$)に負の相関が認められた($p<0.05$)。コーピングの「他者を巻き込んだ情動発散」と性格の「社会的不適応」($r=0.450$)、「主観的」($r=0.438$)との間に正の相関が認められた($p<0.05$)。

実習中では、コーピングの「積極的問題解決」と性格のすべての項目において相関は認められず、コーピングの「問題解決のための相談」と性格の「非協調

的」($r=-0.415$)で実習前と同様に負の相関が認められた($p<0.05$)。また、コーピングの「他者を巻き込んだ情動発散」に対し、性格の「情緒不安定」($r=0.437$)、「気分の変化」($r=0.439$)、「劣等感」($r=0.466$)、「神経質」($r=0.425$)、「社会的不適応」($r=0.487$)、「主観的」($r=0.545$)にいずれも正の相関が認められたが($p<0.01\sim 0.05$)、「活動的」($r=-0.426$)には負の相関が認められた($p<0.05$)。

コーピングの「気分転換」、「視点の転換」については、性格のすべての項目と実習前、実習中とも相関は認められなかった。

考 察

1. 対象者のライフスタイル

本研究の結果から、実習前期間に比べ、実習中は、実習準備や課題、レポート作成などによって、余暇や趣味、娯楽に費やす時間が減少し、休息を十分とる時間が少なくなるといった生活の変化が生じた事が示された。実習前期間は、夏休みと重なる期間もあったが、集中講義や実習前指導があり、部活動やアルバイトも通常の授業時と同様に行っていたので、実習前期間に特別に時間的余裕があったとは考えられない。また、十分休息を取る時

表4. 性格検査と不安の相関

(n=28)

	STAI (状態)		STAI (特性)	
	実習前	実習中	実習前	実習中
社会的不適応	0.046	0.524**	0.395*	0.317
気分の変化	0.091	0.474*	0.091	0.350
劣等感	-0.085	0.431*	0.504*	0.263
主観的	-0.078	0.514**	-0.078	0.198
非協調的	0.159	0.378*	0.389*	0.232
攻撃的	0.070	0.357	0.505**	0.423*

(* : $p<0.05$ ** : $p<0.01$ Spearman の相関係数)

表5. 性格検査とコーピングの相関

(n=28)

	積極的問題解決		問題解決のための相談		他者を巻き込んだ情動発散	
	実習前	実習中	実習前	実習中	実習前	実習中
情緒不安定	0.258	0.033	-0.121	-0.262	0.348	0.437*
社会的不適応	0.310	0.078	-0.144	-0.260	0.450*	0.487**
抑うつ	0.416*	0.158	-0.056	-0.235	0.372	0.335
気分の変化	0.227	0.018	-0.147	-0.364	0.365	0.439*
劣等感	0.105	0.003	-0.040	-0.108	0.346	0.466*
神経質	0.062	0.170	-0.254	-0.246	0.273	0.425*
主観的	0.400*	0.022	-0.061	-0.222	0.438*	0.545**
非協調的	0.180	0.098	-0.391*	-0.415*	0.352	0.339
活動的	-0.143	0.012	0.114	0.151	-0.004	-0.426*
社会的外向	0.282	0.284	0.432	0.244	-0.033	-0.099

(* : $p<0.05$ ** : $p<0.01$ Spearman の相関係数)

間がなくなることによって健康に自信がなくなると考えられ、これは、中野²¹⁾が大学生の健康についての調査で、健康感の低さは日常的にゆとりのないことが影響しているという報告と同様の結果と考えられる。

2. 実習前と実習中の不安の変化

Cattellの定義¹⁸⁾によると、特性不安は、積み重ねられた不安経験に対する反応であるとされており、比較的安定した個人の性格傾向を示すものであるため、本研究における実習前に高いレベルであった特性不安が実習中も高いままであったことは理解が可能である。これに対して、状態不安は、個人がその時おかれた環境により変化する一時的な情緒状態であるため、実習前からすでに高いレベルにあった状態不安が、実習中にさらに高いレベルへ増加したことは、臨床実習による直接的な不安の増加を示すと推察される。適度の緊張感、克服しようとする力(動機づけ)となり、精神的にもよい影響を与える。一方、過度の緊張感是不安な状態を招く¹⁹⁾と考えられている。そのため、今回の調査における状態不安の増加は、臨床実習の過度のストレスが影響したものであると考えられる。佐藤²²⁾は、看護学生を対象にした調査の中で、「実習前よりさらに実習中の状態不安の平均値が高くなる」との結果を得ている。一方、河野ら²³⁾は、「学生は、実習開始前の不安が最も高いが、実習の経過にともなって減少していく」と報告している。本調査では、調査対象者の実習期間の長さは2~4ヶ月とばらつきがあったが、不安の減少を認めず、状態不安は高いまま維持された。これは、学生がおかれた臨床実習の環境は一定ではなく、次々と新しい課題に直面することで、状態不安が高いまま継続する可能性があると考えられる。

3. 実習前と実習中のコーピングの変化および性格との関連

Lazarusら²⁴⁾によれば、コーピングは状況依存性であり、同じ個人でも場合によって異なると言われているが、今回、臨床実習という環境の変化があったにもかかわらず、実習前と実習中のコーピングには全体的に大きな変化が認められなかった。しかし、性格との関連については、実習中には、抑うつがあり気分の変化が大きいなどの情緒不安定な性格で、問題の原因を誰かのせいにする、問題の関係する人を責める、関係のない人に八つ当たりするといった消極的コーピングを多用する傾向が示唆された。情緒不安定性の高い者はイベントに対して過剰に、あるいは否定的に評価する傾向があることや²⁵⁾、情緒不安定性が高いと消極的コーピングを使用する傾向が高いという報告²⁶⁾もあり、本研究も同様の結果であったと考えられる。このことからコーピングは

個人の性格とも深くかかわっているが、全体的にみた時に実習前後の変化が認められなかったのは、個々の性格特性によって相殺されたとも考えられる。

今回、臨床実習によって、現在の自分の能力の内容と限界についての認識が不十分であることや、理想とする能力と現実の自分の能力との差異を再認識することなどがストレスとなり、他人に八つ当たりをするといった消極的コーピングを多用する傾向があったと考えられる。落合ら¹⁾の報告によると臨床実習での不安を因子分析した結果、抽出された7因子中で「知識・技術に対する不安」「意志力」が高得点であり、一方低い得点の因子は「実習に関わる人間関係」「患者・家族との人間関係」「校内での人間関係」といった人間関係に関する因子であった。このことから、実習中は、知識・技術に対する不安の増大により、学生が自分の能力に自信が持てない状態となり、加えて初めての社会学習の場である臨床実習に出た学生が社会的スキルを十分に持ち合わせていない状況であったと考えられる。この状況は、Lazarusら²⁴⁾の定義するコーピング資源(健康とエネルギー、ポジティブな信念、問題解決のスキル、社会的スキル、ソーシャルサポート)が不足している状態と考えられる。また、樫根ら²⁷⁾は、社会的スキルの高い学生ほど挑戦的評価と積極的コーピングが高いと報告していることから考えると本研究における学生は、社会的スキルが低いといったコーピングの資源不足から、自分の能力不足を受け止められず消極的コーピングを多用した可能性も考えられる。今回、人に相談するなど問題を解決するための努力といった積極的コーピングを用いる学生が少なかったのも、コーピング資源であるソーシャルサポートの不足が背景にあるのではないかと考えられる。これらのことから、学生が積極的コーピングを選択できるようになるには指導教員や、臨床指導者との良好な人間関係が必要であると考えられる。

4. 性格と不安との関連

今回の対象者の性格は、社会接触を好む傾向や活発な性質をもっており、全体的に協調性があり社交的であると考えられる。これは、看護学生が一般女子学生に比べ、外向性が高く神経症的傾向が低い集団であるという山本ら²⁸⁾の報告、および桑田ら²⁹⁾の看護学生における日本版モーズレイ性格検査の結果とも類似している。医療職の中でも看護職は、患者や他の医療従事者とのコミュニケーションが重要視される職種であり、対人関係を円滑にできなければ勤まらない職種であるその看護職を将来の仕事に選んだ学生の性格傾向が、社交的で協調性があるというのは理解できる結果であろう。

また、実習前において性格の違いによる不安の状態に相違は認められないが、実習が始まってから突発的に不

不安の状態が発現されるという可能性も示唆される。このことから、実習中はストレスフルな状況であると考えられ、実習のストレスによって気分の変化が大きい、劣等感が強い、主観的で協調性がない、社会的不適応であるなどといった性格傾向が強調されると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、対象の実習期間を平成17年9月から平成18年2月の半年とした。そのため、カリキュラムの都合上、実習班によって測定日の実習内容の違いや実習環境の変化に対する適応などの要素が入る可能性を排除できなかった。また、本研究は調査対象が少ないことから、本研究結果を一般化するためには、今後は看護大学だけでなく、他の医療従事者養成機関などの集団でも同様の調査を実施することが必要だと考える。また、学生が実践的な能力を身につける場として臨床実習が最大の効果を出せるように、学生個々の性格や実習に対する不安に対してソーシャルサポートを行うなど、生活状況を踏まえた実習指導体制の明確化が今後の課題であると考えられる。

結 論

本研究では、臨床実習のストレスに対するソーシャルサポートや効果的な看護実習指導を行うための基礎資料を得る目的で、看護学生の実習ストレス、またそのストレスに対するコーピングの変化および性格との関連について検討した。その結果と考察を以下にまとめた。

1. 状態不安をストレス反応の一つの指標とし、特性不安を性格傾向の指標として、実習前と実習中を比較した結果、特性不安に変化はなかったが、状態不安については、実習中に有意に高値を示したことから、看護学生は臨床実習によるストレスを感じていることが示唆された。
2. 実習中のコーピングでは、「積極的問題解決」や「問題解決のための相談」など積極的コーピングと性格との関連はほとんどなかったが、情緒不安定、劣等感が強く神経質で主観的といった社会的不適応の性格と「他者を巻き込んだ情動発散」などの消極的コーピングに関連があり、特に社会的不適応な性格では、実習のストレスにより消極的コーピングを多用するようになったと考えられる。
3. 性格と不安の関連性については、社会的不適応や気分の変化が大きい、また、劣等感が強く、主観的で非協調的など性格傾向をもつ者は、実習中の不安が増加することが明らかになった。

以上より、臨床実習における不安およびコーピング、性格の関連性の検討結果から、実習ストレスの感じ方やコーピングには、個々の性格が深く関与することが示唆された。また、実習中のコーピングの資源不足が消極的コーピングをもたらすことから、事前学習やソーシャルサポートの強化が積極的コーピングを用いるきっかけを作り、さらにはストレスの軽減に繋がると考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、研究の趣旨をご理解いただき、快く参加・ご協力いただいた看護学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

文 献

1. 落合真喜子, 太田原裕美, 有村優子 他: 臨床実習における不安とストレス感情. 看護展望, 22: 101-109, 1997
2. 野村幸子, 三好さち子, 藤原千恵子 他: 初期の看護実習における学生の実習ストレスに関する研究. 聖隷クリストファー看護大学紀要, 6: 39-40, 2000
3. Admi, H.: Nursing students' stress during the initial clinical experience. J. Nurs. Educ., 36: 323-327, 1997
4. Pagana, K.D.: Stresses and threats reported by baccalaureate students in relation to an initial clinical experience. J. Nurs. Educ., 27: 418-424, 1988
5. 頼藤和寛: ストレス論再考. 作業療法, 12: 202-205, 1993
6. Florian, V., Mikulincer, M. and Taubman, O.: Does hardiness contribute to mental health during a stressful real life situation? The roles of appraisal and coping. J. Pers. Soc. Psychol., 68: 687-695, 1995
7. Parkes, K.R.: Locus of control, cognitive appraisal, and coping in stressful episodes. J. Pers. Soc. Psychol., 46: 655-668, 1984
8. 堤由美子: 臨床実習ストレス調査表 (CSQ) の日本語版の開発. 日本看護研究学会雑誌, 17: 17-26, 1994
9. 山下香枝子: 看護学生の実習におけるストレス反応とストレス源および実習評価の関連. 日本看護学教育学会誌, 1: 16-17, 1991
10. 河村一海, 西村真実子, 永川宅和: 看護臨床実習前後の行動特性とストレスコーピングの変化. 金沢大学医学部保健学科紀要, 20: 115-118, 1996
11. 立石恵子, 立石修康: 作業療法学科臨床学習における学生のストレスコーピング. 九州保健福祉大学研究紀要, 6: 199-203, 2005
12. 中山和美, 寺田眞廣, 星山佳治 他: 看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績の関連に関する研究. 昭和医学会雑誌, 66: 29-37, 2006
13. 池田京子, 藤野邦夫, 尾崎フサ子 他: 老年看護学実習前・

- 後の状態不安要因の検討—STAIを活用して. 日本看護学会論文集, 看護教育, 31 : 170-172, 2000
14. 武田 要, 藤沢しげ子: 理学療法学科学生の実習成績と情意特性: ストレスコーピングと性格特性に注目して. 理学療法学, 21 : 131-135, 2006
 15. 矢田部順吉: 矢田部・ギルフォード検査. 岡堂哲雄編: 心理検査学—心理アセスメントの基本—初版. p.269-281, 垣内出版, 東京, 1975
 16. Spielberger, C.D.: Theory and reseach on anxiety. In C.D.Spielberger (ed.) Anxiety and behavior. Academic Press, New York. 1966
 17. 中里克治, 水口公信: 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成. 心身医学, 22 : 107-112, 1982
 18. 上里一郎: 心理アセスメントハンドブック. p.339-359, 西村書店, 東京, 1996
 19. B.J. ジンマーマン: アルバート・バンデューラ編, : 本明寛, 野口京子監訳. 激動社会の中の自己効力. p.190, 金子書房, 東京, 1997
 20. 影山隆之, 小林敏生, 河島美枝子 他: 勤労者のためのコーピング特性簡易尺度 (BSCP) の開発: 信頼性・妥当性についての基礎的検討. 産業衛生学雑誌, 46 : 103-114, 2004
 21. 中野照代, 藤生君江, 鈴木知代 他: 看護学生と教育学部学生
学生の健康習慣・健康観の比較研究. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 13 : 91-104, 2005
 22. 佐藤信枝: 臨地実習前の不安要因と STAI との関連—基礎看護学実習の学生を対象として. 新潟青陵大学紀要, 2 : 39-45, 2002
 23. 河野保子: 実習評価に関する研究—臨床実習に対する看護学生の緊張感・不安感および疲労に関する一考察. 金沢大学医療技術短期大学部紀要, 1 : 133-139, 1977
 24. Lazarus, R.S. and Folkman, S. : Stress, Appraisal, and Coping. Springer. New York 1984
 25. Watson, D. and Hubbard, B. : Adaptational style and disPositional structure: Coping in the context of the five-factor model. J. Pers. Soc. Psychol., 64:737-774, 1996
 26. 加藤 司: 対人ストレスコーピングと Big Five との関連性について. 性格心理学研究, 9 : 140-141, 2001
 27. 檜根良子, 津田 彰, 命婦恭子: 看護学生の社会的スキルと臨床実習におけるストレスとの関係. 日本看護学会論文集, 看護教育, 32 : 200-202, 2001
 28. 山本有紀, 服部 卓, 宮沢君子: 看護学生のストレスに関して. 群馬保健学紀要, 19 : 77-80, 1998
 29. 桑田 繁, 磨家敦子, 小川光子 他: モーズレイ性格検査による看護専門学生の調査. 醫學と生物學. 東京, 醫學生物學速報會, 136 : 9-11, 1998

Relationships among stress, coping, and personality in nursing clinical training

Chiho Chikamura¹⁾, Toshio Kobayashi¹⁾, Fumiko Ishizaki²⁾, Satomi Aoi³⁾
Tadayuki Iida⁴⁾, Manaho Yamagishi¹⁾ and Tsuyoshi Kataoka¹⁾

- 1) Graduate School of Health Sciences, Hiroshima University
- 2) Department of Communication Science and Disorders, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
- 3) Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
- 4) Department of Public Health, Fujita Health University

Key words : 1. stress 2. coping 3. personality

We investigated the relationships among stress, coping, and personality in nursing students during clinical training in a hospital. The subjects were 28 female nursing school students. The State-Trait Anxiety Inventory (STAI) test was used for evaluation of the psychological response to the stress of clinical training.

The Brief Scales for Coping Profile (BSCP) test was used for evaluation of coping.

These two tests were given before and during clinical training. The Yatabe/Guilford (YG) test was given to students during the spring vacation for assessment of personality. The students experienced stress before and during clinical training, and the state-anxiety levels in the STAI were significantly higher during clinical training. Anxiety level was higher in students with personality traits of “social maladjustment”, “feeling of inferiority” and “nonconformism”. Furthermore, students with such personality traits tended to have a passive style of coping. The results suggest that there is a close relationship between personality and coping style for nursing students under the stressful conditions of clinical training.